園のくらしを育む５

園の風景（１）
ーくらしの中の音風景ー

秋田喜代美

１　音の風景

家庭において、食堂には食器や料理の音、風呂場には風呂桶や水の音というように、場所にはその場に固有の音風景があります。一つの特定の音ではなく、それはある活動の中で自然に出ている風景としての音ともいえます。これは、園のくらしでも同様でしょう。この場所に来ると、この音が聞こえてくるというように、園のくらしの中にある音風景です。マリー・シェーファーは「サウンドスケープ」[注]とこれを呼びました。近代の生活では、音を環境から切り離し、独立した音楽として認識してきたことを問題として、音を場との関係性の中でもう一度とらえ直し、日常生活や環境において音が風景としてどのようにかかわっているのかを見つめていこうという考え方です。

いろいろな園を訪問させていただくと、そこにはその園固有の音風景があります。黄色く甲高い声と電子的な音が響く園、木工する音や水を砂場に流し入れる音などが聞こえてくる園、大きな木の葉が風に吹かれる音や池に入る水の音が聞こえてくる園もあります。これは都心か郊外かといった立地だけではなく、その園の中で生まれる活動や子どもや保育者の心のありようにもよるように思います。音のおもしろいところは、どこからともなく耳に入ってきた音が楽しければ踊り出したり、音に釣られて人がその場に集まり始めたりする力をもっているところでしょう。反対に、いくら大きな音で流されても、それが聴き手の心に届き響くものでなければ、その場の人には生活とかかわりのないノイズにしかならない点です。

2　竹の楽器が醸し出すリズム

高松市保育課が芸術士派遣事業という事業を始めました。音楽、絵画、造形、漆工芸などその土地のアーティストが子どもたちと園で活動を積み重ねていく実践です。高松市を訪問し園での実践の様子を拝見したり、その芸術士さんたちとお話ししたりする機会がありました。

その中の一つ、鬼無士保育所の周りには竹がたくさんあります。そこで、芸術士の村井さんはその竹を使った楽器作りを園庭でされます。自作楽器を幾つも並べ、村井さんと保育者が園庭で演奏し始めると、長さによっていろいろな音がするおもしろさ

やそのリズムに引かれて、子どもたちが集まってきます。その楽器はペイントされていて見た目にも楽しいものでした。やってみたいと早速たたいたり動き出す子、遠巻きに見ている子、いろいろな子がいます。また、先生ご自身がとても楽しんでいる姿がわかります。五歳児がその中心になっていたでしょうか。その演奏の傍らで、今度は村井さんがのこぎり等の工具を使いながらその楽器を作り始めます。また、きりの音もします。二人の男の子はその道具やプロセスに興味津々で、真剣なまなざしで見ています。そこで切り出された竹の木くずを大根おろしに見立てる子どももでてきます。最初からその輪を遠巻きに見つつ参加していた四歳のこうちゃんは、楽器作りの音を「ギコギコ　ギコギコ」と言語化しながら語り始めます。そして今度は恐る恐る片手でバチを持って竹をたたき始めます。村井さんはそれに呼応してたたくことで、次第に皆のリズムの輪が広がり始めます。最初はこわごわだったこうちゃんも、両手で元気にバチを持って一つの竹から、今度はいろいろな竹をたたき始めます。その音がこだまし始めると、園庭の片隅のこの楽器の所に子どもたちが集まってきます。すると、楽器をたたいていた先生は子どもにバチを手渡し、子どもたちと一緒に踊り始めました。園の片隅に生まれた音はリズムにのって踊りの輪をつくり出します。

この園では竹は特別にもたらされたものではなく、裏庭にいつでもあり、またその切られたものは園庭にあったりします。生活の一部になっているものが楽器という道具になっていく過程に参加しながら、一人の子どもがその活動に参加し、音を楽しむ

過程を見せてもらいながら、この姿はしだいに園の音風景になっていくのだろうと感じました。

園で音をつくり出す経験、また自然に聞こえてくる音に耳を澄ます経験などが身体の中に染み込んでいくことが、音を楽しむ経験になるのではないかと私は思うのです。もちろん、楽器のよい音色や大人が真正な楽器を演奏するのを聴く経験も音楽経験として大事かもしれません。しかし、表現発表会などのために、既成の楽器を限られた時間に練習している風景と、こうした無理のない遊びやくらしの中でその土地にある物の中から、音を自ら生み出したり感じ合ったりしていく風景では、子どもの音経験の相違を感じざるを得ません。私は後者のような経験こそ、園のくらしの風景であってほしいと思います。

それは音の風景だけではありません。味覚、触覚、嗅覚などにおいても同様ではないでしょうか。感覚風景を保育者が再度自覚化してみることで、子どもたちの生活の中にあってほしい風景が見えてくるのではないかと感じるのです。文字、活字など視覚優位の世界の中でも、園のくらしは多様な感覚風景を大事にしていくことで、その園らしい保育の質を醸成させていくように思います。

（東京大学大学院教授）

参考文献

R. M. シェーファー著　鳥越けい子他訳『世界の調律　サウンドスケープとはなにか』
平凡社　一九八六年